

# インクルーシブ美術教育研究部会

## 美術教育は障害学とどのように向き合うか—障害者運動とアート

How does art education confront disability studies? : Disability activism and art

荒井裕樹

ARAI Yuki

二松學舎大学

Nishogakusha University

池田吏志

IKEDA Satoshi

広島大学

Hiroshima University

手塚千尋

TETSUKA Chihiro

明治学院大学

Meijigakuin University

### 1. はじめに

本部会では、インクルーシブ美術教育の在り方や可能性を、実践と理論の両側面から検討することを目的としています。本部会の「インクルーシブ美術教育」は造語によるものですが、そのコンセプトは、社会包摂（ソーシャル・インクルージョン）に基づくもので「全ての人々を孤独や孤立、排除や摩擦から援護し、健康で文化的な生活の実現につなげるよう、社会の構成員として包み支え合う」をめざした教育や福祉とのつながり方を探ることを目的としています。そのため、本部会は一般的な意味では、特別支援教育における美術科教育を中心に研究活動をしていきますが、いわゆる障害児（教育）のことだけを対象にしていません。様々な意味で（社会／生涯教育を含む）一般教育制度から除外されるあらゆる人たちが共に学ぶためのシステムの構築を目的としています。

2014年に本部会設立以降、教育と福祉の垣根を越えて多様な実践者をゲストに迎えて対話を重ねてきました。本部会では、設立10年を目前に改めて部会のコンセプトやこれまでの議論をふり返り、現状の共有からシステム構築に向けた新たなフェーズに突入したいと考えています。

### 2. 障害学にどのように向き合うか

今回のフォーラムでは、表題の通り美術教育と障害学のあいだを探ってみたいと思います。障害学とは、障害を分析の切り口として確立する学問、思想、知の運動とされます。障害学では、障害を個人の問題に帰するのではなく、障害のある人の身体と精神と文化を混然一体として捉え、障害というレンズで世界を認識することで、社会的、政治的、文化的、経済的、関係的な矛盾や課題を浮き彫りにし、個別の支援の質的な向上以上に社会変革が目指されます。

翻って、私達が専門とする美術教育の分野では、障害、もしくは障害のある子供達は、特別支援教育の枠組みで捉えられ、学校教育の制度的基盤に基づく学習指導の方略やカリキュラム開発等の実践・研究が行われてきました。蓄積された成果はもちろん、私達の財産といえます。しかしその一方で、例えば学びのユニバーサルデザインを用いた指導が学習環境の部分的な整備・改善にとどまり、根本的な解決に至っていないこと、また、障害を学際的な視点から捉え、社会の構造を変化させることに美術教育が十分に寄与できていないことにも、どこか歯がゆさを感じています。美術教育が持つ可能性をより広範に捉える必要性があるのではないかと考えています。

そこで、今回のフォーラムでは、二松學舎大学の荒井裕樹氏を講師にお招きし、障害学とは何か、また、「障害」と「自己表現」との関係性についてお話を伺い、私達があたり前と思っている前提に搖さぶりをかけ、障害と美術教育のあいだの可能性を再考したいと思います。

#### 荒井 裕樹（あらい ゆうき）

1980年生まれ。二松學舎大学文学部准教授。専門は障害者文化論、日本近現代文学。東京大学大学院人文社会系研究科修了。博士（文学）。

「青い芝の会」を中心とした障害者運動の資料・史料の精緻な調査のみならず、運動の当事者とも継続的な親交を持つ。また、精神科病院で取り組まれる造形教室や展覧会の企画・運営にも関わる。著書に、『隔離の文学—ハンセン病療養所の自己表現史』（2011、書肆アルス）、『生きていく絵—アートが人を〈癒す〉とき』（2013、亜紀書房）、『障害者差別を問い合わせなおす』（2020、筑摩書房）、『車椅子の横に立つ人—障害から見つめる「生きていく」』（2020、青土社）などがある。